
平成 25 年

10 月の普及活動状況

ダイジェスト版

～県下 10 農林事務所農業普及課と農業革新支援センターの取組～



岐阜県農政部農業経営課

活力ある新産地づくり

中濃農林■ゆず ナギナタガヤによる草生省力栽培の実証

関市上之保地域では、ゆずの産地づくりに取り組んでいるが、生産者の高齢化が進み、園地の維持管理を凶る上で、夏期の除草が大きな負担となっていた。そこで、農業普及課では、この時期にナギナタガヤを播種し、来年の夏には繁茂させて除草作業を行わないですむ「草生栽培園」を提案し、実証ほを設置した。

10月8日に播種を行い、10月下旬には順調な発芽、生育を確認した。生育経過を観察し、雑草抑制効果、作業性の評価を行う。



【播種作業の様子】

売れる農畜産物づくり

岐阜農林■ブロッコリー 中間管理に関する栽培研修会を開催

農業普及課では、10月4～17日にJAぎふブロッコリー生産連絡協議会員を対象に、各地域で栽培研修会を実施した(計8か所)。

研修会では、気候の変動に対応できるように中耕・土寄せ・追肥・病害虫防除などの中間管理の徹底を指導した。今回、現地で開催したことにより、参加者が、自身の圃場の生育状況

と見比べ、今やらなければならないことを確認できた。

なお、現在の状況は、10月28日から早採り品種「おはよう」の出荷を開始したところである。



【圃場で説明する普及指導員】

西濃農林■冬春トマト 海津トマト部会において平成26年産の栄養診断を開始

農業普及課では、定期的な葉中硝酸イオン濃度等の測定(栄養診断)に基づく、生育状況に適した肥培管理技術の確立に取り組んでいる。本年で6年目に入り、データの蓄積が進み、生産者の取組も定着してきている。

昨年からは、新たにリン酸やカリの測定も開始し、三大肥料成分の栽培期間を通じた変動の把握に努めている。併せて今年は、葉先枯れ軽減対策としての苗へのリン酸施用の効果確認等も実施している。

今後も栄養診断に基づく的確な施肥など、肥培管理技術の確立・普及に向け引き続き取組を進めていく。

恵那農林■夏秋トマト 産地後半出荷量の安定と産地出荷量の確保を目指した取組みの検証

東美濃夏秋トマト生産協議会技術部会では、今年度の実証取組結果を検討するため、10月8日にほ場巡回検討会を行い、技術部会員をはじめJA営農担当者等15名の参加のもと、各地域の実証ほと中山間農業研究所中津川支所を巡回した。

今年は、後半の出荷量を安定させるための2期作、出荷量確保のための品種試験、省力化試験の3課題に取り組んだ。各ほ場では、技術部会員が実証概要の説明を行うとともに、農業普及課がJA営農指導員と行った調査データの説明を行い、全員で意見交換を行った。



【実証結果について意見交換する参加者】

遅植え作型の実証で単価の上がりやすい9月以降の出荷割合が高まるなど、それぞれの試験で効果が確認できたが、今後の普及に向けては、各経営体に合った形での導入推進を図ることが必要と考えられる。また、一部の技術部会員から実証結果の課題も出たが、他の部会員から改善方法の助言が行われるなど、積極的な活動が見られた。

農業普及課では、今後、技術部会での最終調査結果のとりまとめを支援し、東美濃夏秋トマト生産協議会員への報告と技術導入を支援していく。

飛騨農林■ほうれんそう **ハウレンソウケナガコナダニ対策研修会を開催**

飛騨ほうれんそうでは、春と秋の低温期に発生するハウレンソウケナガコナダニの被害が、大きな問題となっている。

そこで農業普及課では、ほうれんそう部会や中山間農業研究所と連携し、新しい防除技術「ダゾメット粉粒剤の秋冬処理」の実証ほを設置して、現地での効果の確認に加え、効率的な使用方法について調査を進め、技術の普及を図っている。

実証ほでは、ハウレンソウケナガコナダニの被害を抑制することができ、10月11日から30日にかけて、各地域の5生産部会を対象に研修会を開いて、実証ほで得られた結果や処理手順について説明を行った。

活発に質問が出される等、参加者の関心は高く、今秋には多数の生産者がこの新技術を導入する見込みである。農業普及課では引き続き、より効果的な処理技術の確立に向け検討を進めていく。



【対策を説明する普及指導員】

農業経営課■夏秋トマト **夏秋トマト担当者会議開催**

夏秋トマトは、今年、気象変動が激しかったにも関わらず、10月31日現在で出荷量は、多収であった昨年並みの14,147tを確保出来ており、単価も331円/kgと比較的良好ことから、販売額は前年対比107%の46.8億円となり、平成17年以降最高となる見込みである。

このような中、農業経営課では、10月29日に夏秋トマトを担当する普及指導員、試験研究担当者等による担当者会議を開催した。

会議では、可茂地区から今年、過去最高の413tの生産量を記録し、その要因として栽植本数を2000本/10aにする等の基本技術のポイントを絞って研修会や巡回指導で徹底させてきたことなどが報告され、その手法に関係者の注目が集まった。一方で、かいよう病や青枯病等の土壌病害の発生が県下全体で増加傾向にあることも報告され、一部では壊滅的な被害となっている事例も見られた。そこで、次年度作に向け、農業革新支援専門員、普及指導員等が連携し、土壌消毒の実施など収穫終了時点からの病害対策を反省会などで強力に推進することとした。

今後、各地域で生産組合等の反省会が計画されており、加茂地区での優良な取組事例を参考に、それぞれの地域における生産量の増大に向けた更なる取り組みの推進や、次年度作に向けた具体的な病害対策について、各地域での指導等を徹底していく。

戦略的な流通・販売

可茂農林■大豆 **大豆「中鉄砲」活用・PRの取組（可児地域）**

可児地域（可児市、御嵩町）で、今年度から取組が開始された「中鉄砲復活プロジェクト」（主体：JAめぐみの可児農業サポートセンター）の関係者打ち合わせが10月15日に同JAサポートセンターにおいて行われた。

当日は、当プロジェクトに協働する可児地域の3洋食店、JAめぐみの、農林事務所が出席し、「中鉄砲」関連商品やメニューのイベント出店・PRに対する消費者の反応について各店シェフの感想等を情報交換した後、今後の活動について検討が行われた。

今後も可児農業祭への出店・PRをはじめ、各店における新たなメニューの開発等、洋食店と関係者が連携した取り組みやPR活動の推進が確認された。

農業普及課では、地域農産物の生産振興・消費拡大、地産地消・農商工連携の推進支援等の観点から、JA主体で昨年度から取り組みが始まっている洋菓子開発（「可児野菜スイーツ」プロジェクト）とともに今後も支援を継続していく。

東濃農林■農産物直売所 きなあつ瑞浪全体研修会が開催

10月15日にきなあつ瑞浪出荷者協議会が全体研修会を開催し、会員80名が出席した。

今回の研修会では、表示を含めた出荷物の品質向上を目的に開催され、農業普及課から栽培履歴記帳上の留意点を説明した。その他、みずなみアグリ(株)からこれまでに受けたクレームの内容とその対策、農業振興課から生鮮食品の表示と米トレーサビリティ法に関連する記録の作成や保管等の留意点、東濃保健所から加工食品の表示の説明が行われ、幅広い内容であった。

きなあつ瑞浪は、オープンして1年4カ月が経過した。売上高が約2億円と当初目標の8千万円を大きく上回る等、順調に推移している一方、お客様からのクレームは、残念ながら無くならないのが現状である。会員からは、「こうした研修会は定期的で開催しなければならない。」と危機感を持った意見も聞かれる等、協議会員の意識も高まってきている。農業普及課では関係機関と連携しながら、引き続き安全・安心で品質の高い農産物が消費者へ提供される様支援していく。



【全体研修会の様子】

多様な担い手の育成・確保

郡上農林■フキ 不作付地の解消と食材供給を目指して

「人・農地プラン」のモデル地域である郡上市八幡町河鹿地区では、不作付地の解消と農産加工グループへの食材供給を目指したフキ栽培を行うため、7月27日に河鹿山菜生産組合が設立された。

10月12日には同市高鷲町の栽培ほ場から根株を採取し、同14日に3筆(約20a)のほ場で定植が行われた。農業普及課は、定植方法や今後の管理方法等について指導を行い、組合では、生育初期の雑草対策のためマルチ栽培を実施することとした。組合員からは、「3、4年後の収穫が楽しみ」との声が聞かれる等、今後の取り組みの拡大が期待される。



【フキ定植作業】

下呂農林■新規栽培希望者 トマト収穫体験研修会で就農希望者を発掘

下呂市蔬菜出荷組合トマト部会では、10月6日に第2回収穫体験研修会を萩原町内で開催した。

今回の研修会には、来年からトマト栽培を始める新規就農者1名と下呂市へ移住しての就農を希望する2名が参加し、収穫と選別の体験及び選果場と中玉トマトほ場の視察を行った。

トマト部会では、今年度から新規栽培者発掘のため下呂地域担い手育成総合支援協議会(下呂市、JAひだ、下呂農林事務所)の支援により、年間を通しての体験研修会を開催している。なお、今回の研修会に参加した移住就農希望者2名については現在、春からの長期研修開始に向けた準備を進めている。



【農家の指導で収穫体験】

魅力ある農村づくり

揖斐農林■鳥獣害対策 鳥獣被害対策として各種支援を実施

① 池田町ふるさと祭で鳥獣害対策を啓発

10月5日に池田町役場周辺で開催された「第36回みの池田ふるさと祭」において、農業普及課では農業振興課と連携して鳥獣害対策コーナーを設置し、鳥獣被害のパネル展示や



【みの池田ふるさと祭】

退散鳥獣（ロケット花火発射器具）等の追い払い道具の展示、営農相談活動を行った。
興味深そうに追い払い道具を手に取る来場者も多く、地域ぐるみでの有害鳥獣の追い払い活動の重要性を啓発した。

② 大野町でカラス被害対策を実施

大野町では、特産の柿の収穫期を迎え、柿に食害をもたらすカラス対策として、猟友会のハンターによる捕獲活動を9～10月にかけて6回実施した。農業普及課及び農業振興課は、退散鳥獣等を駆使して、カラスをハンターが待つ地区へ追い込むなどして捕獲活動をサポートした。

猟友会のユニフォームと絆ベストのオレンジ色をカラスに覚えさせて、カラス追い払い活動に効果を上げている。

③ 池田町農業委員会が獣害対策先進地視察研修を実施

10月28日、池田町農業委員会は、郡上市宮地を訪問して視察研修を行った。県農村振興課酒井鳥獣害対策監の指導・説明の下、過去数年にわたる有害鳥獣との闘い、集落ぐるみでの取組、改良と進化を重ねた猪鹿鳥無猿柵の設置方法などを実物を見ながら学んだ。

鳥獣害対策の研修会後に地元食材を使った農村レストランや農産物直売所等を視察する等、幅広く、中身の濃い視察研修となった。農業普及課では、鳥獣害対策に関する情報提供や、研修計画や実施について支援を行った。



【猟友会によるカラス駆除】



【郡上市への視察】